

# はじめに

森山 公夫

(陽和病院)

1998年6月19日朝、パシフィコ横浜の総会場の舞台裏でわたしたちは、総会開始を期待と不安の中で待っていた。幕開きの瞬間、まばらな客席が目にとびこんできて、わたしは一瞬蒼ざめた。だが、杞憂をのりこえて続々とつめかけた参加者により、間もなく客席はいっぱいになっていった。朝の電車事故により多勢が遅刻したのであった。

こうしてフォーラムは、初日より満場の熱気にあふれて進行した。

午前の第一シンポジウムでは、緊急の法改正をめぐり各層から基本的問題提起がなされ、次いで午後からの基調シンポジウムは国際的視点を踏まえて今後の日本のあるべき精神保健の方向を模索した。その夜開かれた交流集會も、多彩な顔ぶれの交流の場として盛り上がった。そして翌20日午前の第三シンポジウムでは様々なライフステージに応じたそれぞれの場でのメンタルヘルスが初めて論じられ、啓発的であった。午後の第四シンポジウムは現場での実践を踏まえて生活に密着した圏域問題を中心に、精神保健医療福祉のあり方をさぐった。そして最後の総括討論では、前日夜から運営委員の手で練りに練った「横浜宣言」が採択されて全会議は幕を閉じた。

2日間を通して全参加者は約850名、参加団体は27。わが国における精神保健医療福祉の従事者ほぼすべての層を中心に、当事者や一般市民の参加をえて、討論時間が少ないという難点はあったが、熱心な討論のすえ本フォーラムは成功裡に終わった。

思えば長い道のりであった。第一回の国内フォーラムは、改正精神保健法の実施を目前に、1988年2月京都で「精神医療従事者団体懇談会」(13団体で構成)の主催で開かれ、精神保健法の抜本改正をめざす4項目を確認した。そして第二回は、精神保健法見直しを目標に1991年11月、千葉県幕張で約600名の参加者をえて開かれ、5項目が確認された。主催団体は計19団体に増え、状況の広がりを踏まえてその名も「精神保健従事者団体懇談会」と改めた。こうして今回の第三フォーラムに至ったのである。

この間精神保健をめぐる状況は大きく変化し、精従懇も成長してきた。成長の主因は、運動の広がりである。だが副因に、わたしたちの採ってきた運動方針が挙げられよう。

わたしたちの「精従懇」では初めから、各団体のもつ差異を越え、全体の最大公約数的なコンセンサスの形成を課題としてきた。そのためこれまでも多くの難問に逢着しながら、常に忍耐強く合意形成を目指してきた。現在の変動期にあって、わたしたち従事者が合意形成に失敗したとき、行政が恣意的に各団体の意見を利用してその意志を貫徹するという不幸な事態が待っているだけである。そしてそもそも、差異を認めながら共に生きて行くというこの運動のあり方は、まさにノーマライゼーション理念に即したものである。

最後に今回のフォーラムの成功が全運営委員の熱意によること、「宣言」の実現はさらなる運動の拡大にかかることを改めて強調したい。